

王昭君故事の日本近現代文学の人物描写への引用

阿部 泰記

一 はじめに

王昭君は前漢の竟寧元年（前33年）に匈奴の呼韓邪単于に降嫁して、匈奴を懐柔するという重要な役割を果たした著名な宮女である。その故事は奈良時代（710年-794年）に遣唐使によって日本に伝来し、それ以来、現代に至るまで、漢詩・和歌・物語・謡曲・浄瑠璃・説経節・浮世絵・児童唱歌・新体詩・小説等の様々な文学作品に引用されて彩を副えた。本論では日本近現代文学における昭君・姫君・婦女・娼妓などの人物描写への王昭君故事の引用について考察してみたい。¹

二 昭君

日本近現代においては国家や家庭のために自分を犠牲にするという王昭君と同じような時代環境があり、漢詩・雑記・雑話・今様・箏曲・演説・短詩・唱歌などの形式で王昭君故事そのものを叙述する作品が多数創作された。それらの作品には以下のようなものがある。

1. 吉田松陰²「王昭君詞。用晋石季倫韻、³ 井引」（安政4年〔1857年〕）

『松陰詩集』二卷（山口：吉田庫三、明治16年〔1883年〕）下卷五言詩二十八句。王昭君の悲哀を詠んだ前賢の詩文を批判し、匈奴に降嫁して辺境の戦火を防いだ王昭君の功名を称える。

（引）「昭君入宮不幸、請掖庭令求当匈奴請、『後漢書』所載明白、石季倫已下、唐韋端己・宋歐陽永叔・王介甫等、詠昭君者、率多哀怨之辭、殊不悉其本志。蓋『西京雜記』之說害之也。今予特掲而詠之。昭君有知、当一笑于地下耳。」⁴

（詞）人生功名重、碌々死掖庭。寸心君不識、揺々如懸旌。（中略）呼韓適求婚、自請列籍名。豊容驚九重、去取閼氏榮。単于益親附、塞馬不復驚。安国兼榮己、酷勝中行生。世人寧知是、誣妄盈史冊。（以下略）⁵

2. 秋田源八「聾嫗（むこよめ）は能く聞能く撰むべき事」

ただ秋田源八『羽後民情録』（文久2年〔1862年〕-元治1年〔1864年〕）（三）「放言雜記」では、王昭

¹ 使用した文献は主として国立国会図書館デジタルコレクション中の作品である。

² 吉田義卿（文政13年〔1830年〕-安政6年〔1859年〕）。長州藩士。「松下村塾」を開いて明治維新の志士を教育した。

³ 晋石崇『王明君辞一首并序』は、「我本漢家子、將適単于庭。辞訣未及終、前軀已抗旌。僕御涕流離、轅馬悲且鳴。哀鬱傷五内、泣淚湿珠纓。行行日已遠、遂造匈奴城。延我於穹廬、加我閼氏名。殊類非所安、雖貴非所榮。父子見凌辱、对之慚且驚。殺身良不易、默默以苟生。（以下略）」

⁴ 山口県教育会編『吉田松陰全集』第7巻（東京：岩波書店、昭和15年〔1940年〕）189頁には、「昭君、宮に入れて幸せられず、掖庭令に請ひて匈奴の請に当らんことを求む、『後漢書』の載する所明白にして、石季倫已下、唐の韋端己・宋の歐陽永叔・王介甫等昭君を詠ずる者、率ね哀怨の辞多く、殊に其の本志を悉さず。蓋し『西京雜記』の説之れを害するなり。今予特に掲げて之れを詠ず。昭君知るあらば当に地下に一笑すべけんのみ。」と訓読する。

⁵ 前掲『吉田松陰全集』190頁には、「人生功名重し、碌々掖庭に死せんや。寸心君識らず、揺々として懸旌の如し。（中略）呼韓適と婚を求む、自ら請うて籍名を列ぬ。豊容九重を驚かし、去って閼氏の榮を取る。単于益と親附し、塞馬復た驚かず。国を安んじて兼ねて己を榮す、酷だ中行生に勝る。世人寧んぞ是を知らん、誣妄史冊に盈つ。（以下略）」と訓読する。

君は美貌を笠に着て絵師に賄賂を贈らなかつたため醜く画かれて胡国に送られたと言ひ、王昭君故事の負の部分を用ひして、容貌で姫を選んではならないと戒めている。

女振りがよひとて我慢ならざるものなり、慢心よりして異国の妻となりて生涯患に沈み死したるべし。(中略) 姫は勿論悉く美麗を撰むに及ばず、第一縫針の業よく家のふき掃除よく、棚木までも心付父母に孝行夫に貞、万事物和らかなるをよく見聞して姫もらふべし、

3. 古川正雄『古今雑話』(明治5年〔1872年〕)

また古川正雄⁶『古今雑話』では、漢の元帝を好色な帝王だとし、王昭君が元帝によって野蛮な匈奴に降嫁させられた犠牲者だと言う。

嗚呼王昭君ノ如キハ不幸ニシテ姪逸無道ナル天子ノ勝手次第ニセラレテ其所ヲ得ズ。其自由ヲ保ツ能ハサル者ト云フベシ。世ノ女子達モ王昭君ノ物語リヲ聞テ君主特裁ホド恐ロシキモノハナキヲ悟ルベシ、サレドモ昭君ハ天性ノ麗質ノ御蔭ニテ後世マデモ其名ヲ言伝ヘラレ高祖ノトキノ擬皇女ニ比スレバ少シク仕合アリト云フベシ。

4. 佐々木信綱⁷「今様『王昭君』」

七五調四句、四段。相沢英二郎編『今調唱歌集』(明治23年〔1890年〕)⁸収。王昭君が美貌を恃んで画工に賄賂せず、醜く描かれて胡地に嫁ぎ、憂愁のうちに老いていく様子を詠んでいる。

思ひあがりし我かげも、やさしきまでにおとろへて、うつす鏡は曇らねど、心は晴る、時ぞなき。ひなのすまひにうらぶれて、目にみる物もきくものも、かはりはてしをなつかしく、変らぬものは月のかげ。藻に住む虫のわれからと、悔の八千度今さらに、かひなきもののそのまゝを、思へば恨めし絵空言。北吹く風の行末も、南より来るかりがねも、朝な夕なに身にしみて、ただ恋しきは都なり。

5. 箏曲『照君』(本調子)

小松景和(弘化4年〔1847年〕-大正4年〔1915年〕)編『花がたみ』上(名古屋:小林楽器店、明治29年〔1896年〕)収。王昭君が匈奴に降嫁する旅路に琵琶を弾いて心を慰める光景を箏曲によって表現する。

〔前引〕さけばちるならひとへど〔合〕うきはまたたぐひ〔合〕あらしの風だにも〔合〕ひかりのどけきこのへの〔合〕はるにいろかを争ひし〔合〕花のおもかげ〔合〕いつしかに〔合〕ひなのたびぢにやつれはて〔合〕しをるる袖に〔合〕白露の〔合〕かかるすがたを〔合〕みづぐきに〔合〕かねてやしりて〔合〕うつしけむ〔合〕たなれのびはのねにたてて〔合〕かきならしつづなげくにも〔合〕今はかひなき四つの糸

6. 「大内青巒君演説」

大日本宗教家大会事務所編『宗教家大会彙報:時局に対する宗教家の態度』(東京:金港堂、明治37年〔1904年〕)第三「大会の演説及祝辞」(一)掲載。日露戦争(1904年-1905年)を時代背景とした演説であり、漢代に王昭君を贈ることで匈奴の襲撃を抑えることができたと言ひ、日本はそうした北方の

⁶ 教育者。福沢諭吉の弟子。慶応義塾初代塾長。

⁷ 明治5年(1872年)-昭和38年(1963年))。歌人・国文学者。明治31年(1898年)に「竹柏会」を結成して木下利玄・柳原白蓮など、多くの歌人を育成した。

⁸ 中川柳涯『最新実用女子日用文』(東京:日吉堂、明治38年〔1905年〕)頭書「今様類聚」転載。『日本歴代「王昭君」故事』(山口:阿部泰記、2018年)第七章「明治時代」参照。

野蛮人の血を引くロシア側から人種・宗教の異同に関して中傷を受けていると述べる。

秦の始皇の時代になりますと北の方の北狄がいたづらをして仕方がない、(中略) 降って漢の時代になると益々其勢力を抑へることが出来ずして、遂に漢の元帝は、王昭君といふ美人を姫宮様のつもりにして匈奴の君に娶はせてヤット和睦したこともありましたが、(中略) 其野蛮人の相続人は露西亜であるといふことを我邦の人も西洋各国の人々も忘れられないように願ひたいと思ふのであります。

7. 春木露滴『高潔優雅短詩』(大阪: 田村熙春堂、明治39年〔1906年〕)

第一章「理想の恋愛」(二一)『明悟』では、短詩によって美貌で知られた王昭君と楊貴妃の悲惨な末路を詠む。

三千の照君 色を奪へど、塞外の塵 遁られもせず、
楊妃の寵 国を傾けど、馬嵬⁹の害は 免れもせず。

8. 伊達奥州『女性観附通人漫語』(東京: 博文館、明治40年〔1907年〕)

第七章「虚栄、自惚、瘦我慢強気ものなり」では、女性は美貌を笠に着て失敗すると述べ、王昭君と楊貴妃を例に引く。

王昭君の胡に適しは、其の美貌を恃めることの多きに過ぎたるに由らざるか。楊貴妃の馬嵬の露と消えて花鈿地に委し、人の収むるなきに至れるも、彼が美を負ふに過ぎて、放縦擅恣に到らざるなかりしには由らざるか。実に婦人の歴史は容貌の歴史なれや。

9. 女学唱歌『王昭君』上下二篇・楽譜付

白井規矩郎・内田条太郎編『花紅葉』(東京: 朝野書店、明治41年〔1908年〕) 収。「王昭君出塞」の場面を演出し、王昭君、父母、従卒、勅使がそれぞれ歌詞を担当する。

〔上〕(照君) 消ゆる思ひの、つゆの身や。つゆとはかなく、消えもせで、うらぶれの我世淋しき、運命かな。(従卒詞) いざいざ御馬に召され候へ。(父) すみなれし、(照君) 都もあすは夢にのみ、(照君) 露の命の消えもせで、(父母) かなしやな、人に別れて何にかゑまむ、人に別れて何にかいきむ、(照君) 明日は涙に、(従卒) しづむ身なれば、(照君詞) せめてせめて思出とならむ面影になうなう人々ゑみてたび候へ。(従卒詞) 辺風ふきたつ秋の心緒、流水ながれそふ夜の涙行。〔下〕(勅使詞) なうなうしばし、これは君よりの御使にて候、しばしとどまらせられ候へ。(照君) なに御勅使とかや、かなしや今日の此身に、何承らん程の事もなし。(勅使詞) いやとよ、今さら惜しき御わかれの、此の夕べに御覧せ参らせんと、これは君が御手なれの御琵琶にて候。(照君詞) あら賜り候とや、今日のこの身に、(従卒詞) わかれ兼てぞ散りてゆく、(照君詞) わかれ兼ても帰り行く、(勅使詞) 叡慮かしこき御なげき、思ひやり奉るだに御いたはしく候へ。(照君詞) いかにかせむ中々に、

王 昭 君
上

従 卒、いざいざ御馬に召され候へ。
王 昭 君、せめて せめて、思ひ出とならむ 面影、
なうなう人々 ゑみてたび候へ。

⁹ 原文は「洪傀 (ばくわい)」。

思出つらきこの御かたみ、(勅使詞) 叢露蕭條の御道すから、せめてうきを此の四つの緒にと、(照君詞) やれてしをれし、此袖に、(従卒詞) 御道すからこれを弾じて、(従卒合唱) 御道すからこれを弾じて、(父詞) よしや身はうつしきだめの浅しとて、(母詞) 君がなさけの深みぐさ、(照君詞) げにげに御情の程身にしみて、げに身にしみて覚え候、涙の袖にゑみてゆきしと御伝へ候へ。(勅使詞) いざさらば、とはの御かたみ一曲、あそばしてたび候へ。(照君) 高山峩々として、河水は快々たり、父よ母よ、ゆくては遠し、ああ哀しいかな、憂ひ惻んで腸をたつ、(父母) あれゆきますか、何とせん、まてよ人、まてよ駒、「狭霧に消え入る馬上の人、かすかに残る悲怨のひびき、雁がね低うないて、たそがれゆく、漢宮のほとり。」

なお王昭君故事を唱歌形式で表現した作品として、村田春海¹⁰、奥好義¹¹撰譜『保育唱歌』八十五首(明治12年〔1879年〕)¹²第八十首「王昭君」全五段がある。¹³

10. 門野重九郎氏『王昭君の墓を弔ふ』

奎城生(増田義一)『茶前茶後』(東京:実業之日本社、昭和2年〔1927年〕)(四九)。実業家の門野重九郎が、筋を通して匈奴に嫁いだとして王昭君を敬愛してその墓に参詣し、中国人との意思疎通を図ろうと考えたことを述べる。

門野重九郎氏は北京に滞在中、同地を距る四百廿哩蒙古に入り、有名なる王昭君の墓を弔ふたさうだ。(中略) 王昭君は漢の武帝〔元帝の誤〕ともあらうものが、一旦約束してそれを破るは宜しくないと言って断然匈奴へ嫁した。(中略) 門野氏は其王昭君の墓に詣でて意思疎通を計って来たが支那人とは思ふやうに疎通ができなかったとの述懐談がある。此墓に詣でた時に一首あり、曰く、「モゴリアに漢の名妃の跡訪へば 胡風静かにひばり啼くなり」

11. 藤谷哲太郎『紫瀾詩鈔』(兵庫:藤谷紫瀾説詩房、昭和5年〔1930年〕)

七言四句「王昭君」には、明李詔(1506年-1593年)『戒庵老人漫筆』卷一の「江陰人題昭君図、能使明妃嫁胡虜、画工応漢忠臣」の記述に倣って、王昭君にその美貌によって国を滅亡させなかった功績をもって、画工を忠臣だと評価する。

柳眉花面靚粧新、辺地定知初遇春。不使佳人誤君国、画工何識是忠臣。¹⁴

12. 伊藤秀吉『紅灯下の彼女の生活』(東京:実業之日本社、昭和6年〔1931年〕)

第一篇「売姪沿革史」第一章「売姪の歴史」第三節「婚姻的売姪」には、漢の元帝が国土を守るため王昭君を匈奴の呼韓邪単于に贈ったのは「婚姻的売姪」だと定義し、戦国時代の政略結婚もこの類

¹⁰ 国学者、歌人。賀茂真淵の門下。漢詩集『金織詩草』、歌文集『琴後集』がある。

¹¹ 雅楽師、作曲家。1870年、宮内省雅楽局にて雅楽を演奏し、洋楽を教習した。その『君が代』は祝日大祭日の唱歌に選定された。『婦人従軍歌』、『天長節』、『勇敢なる水兵』等の歌曲を創作した。

¹² 市川八十吉編『幼稚園唱歌』(東京:鴻盟社、明治19年〔1886年〕)収。『原典による近代唱歌集成 誕生、変遷、伝播』六「伶人たちの唱歌～保育唱歌」(ビクターエンタテインメントVictorEntertainment、2000年4月)楽譜によって古曲を再現する。後に音楽会が編纂した『薩摩琵琶歌』(栗原吉五郎、1892年)「王昭君」の歌詞も『保育唱歌』「王昭君」の歌詞を用いている。秋山治子「東京女子師範学校附属幼稚園の保育音楽について」(白梅学園短期大学紀要33、1997年)第57-72頁。

¹³ 『日本歴代「王昭君」故事』第七章「明治時代」参照。山田美妙編『露衣香扇影』(大阪:青木嵩山堂、明治32年〔1899年〕)「王昭君」はそれを転載し、第五段「はるの日の ひかりもうとき 古づかに くさのみどりや いかのにのこせる」を「反歌」として掲載している。

¹⁴ 「柳眉花面に靚粧は新た、辺地に定めて知らん初めて春に遇ふを。佳人をして君国を誤らせず、画工は何ぞ識らん是れ忠臣なるを。」

であると言う。

元帝が後宮第一の美女王昭君（紀元前三三年）を匈奴の呼韓邪単于に贈り、為に漢の辺土平なるを得たのも、一種の婚姻的売姪である。我朝の戦国時代に於ける政略結婚は皆此の婚姻的売姪であって、織田信長に対する斎藤道三の娘の如き、道三は織田家侵略の下心より発し、信長も亦夫人の寢息を窺って深夜火の見櫓に上り、斎藤方返り忠の合図の狼煙を待った（一五六一年）のである。

13. 沢田順次郎『餓鬼道』（東京：巳羊社、昭和8年〔1933年〕）

第四「享樂の交換－妻妾を強ひ又は其の同意を得て他と享樂を交換する悪風」四「貸借的淫行」ろ「政治的關係」には、漢が匈奴を懐柔するために王昭君を降嫁させたと述べる。

政治的關係は、妻妾の貸借關係を、政略に利用したものであって、古来多く用いられた政略である。（中略）恚ういふ政略は、多く戦国時代に用ひられたもので、支那では漢帝が、匈奴を懐柔するために、宮女王昭君を、匈奴に遣はし、我が国では後醍醐の帝が、時の功臣左中將義貞に、勾当内侍を賜はって、其の心を慰めた例がある。

14. 小林一郎『聖徳太子の憲法と大乘仏教』（東京：大乘仏教会、昭和9年〔1934年〕）

「四、聖徳太子の憲法」では、第十四条で「群臣百寮、無有嫉妬」¹⁵と言って臣下たちに嫉妬を戒めていることについて説明し、有能な人材が嫉妬されて世に出られなくなる弊害の良い例として、王昭君が宮中で嫉妬されて匈奴に降嫁させられた例を挙げている。

漢の王昭君は非常な美人であったが、漢王の後宮に入って仕ふるに及び、其の美を妬む者の為に種々の迫害を受けて居た。（中略）平生王昭君を妬んで居た人々が画工に賄賂を贈り、王昭君を最も醜く画かせたので、之を匈奴へ遣ることに決定した。（中略）氣の毒な王昭君は匈奴の地で寂しく一生を終った。

15. 加島恵太郎¹⁶『洗心詩集』（鳥取：加島恵太郎、昭和14年〔1939年〕）

第四編五言古詩『王昭君』には、画師のみならず世間は欺瞞に満ちており、王昭君は終生心愉しまなかつたと言う。

（前八句略）毳帳南帰夢、終生色莫愉。人世多欺罔、豈啻画師誣。淚灑冢上草、青青永不渝。¹⁷

16. 本多佑輔画「王昭君嫁胡図」

木村小舟『少年文学史』（東京：童話春秋社、昭和17年〔1942年〕）「明治篇」上卷第三篇「躍進時代」第四節「『小国民』の効果」に評価する。

本多佑輔（天城）氏¹⁸の王昭君嫁胡の図、抜群といふべきか。荒涼寂寞の胡地を獐豸獣の如き胡人に擁されて、絶世の美人白馬



¹⁵ 「群臣百寮は、嫉妬有る無かれ。」

¹⁶ 実業家、政治家、漢詩人。鳥取県会議員。号は洗心。『洗心詩集』六編。

¹⁷ 「毳帳に南帰の夢、終生色は愉しむ莫し。人世欺罔多し、豈啻に画師の誣のみならん。涙は冢上の草に灑ぎ、青青として永く渝らず。」

¹⁸ 慶応3年（1867年）－昭和21年（1946年）。日本画家。

に騎して行く、おのづから絶好の画題たり。これを撰むこと既によし、況やこれを描くに足る氏の手腕あるをや、幾千の観客、此前に立ちて去る能はざりしも宜なり。

三 姫君

照天姫・小宰相・武家や公家の姫君など高貴な女性の悲劇的な運命も王昭君のそれに喩えられた。

1. 照天姫

絳山編『養小栗外伝』（文化十年〔1813年〕序。東京：楽成社、明治18年〔1885年〕）に登場する名武常陸介厚光の娘。厚光が観音菩薩に祈願して生まれ、観音の加護で艱難を免れる。川に身を投じるが人買の美登に救われ、万長に買われて、青墓で娼妓になるよう強いられるがこれを拒み、匈奴に嫁した王昭君のような悲哀を感じる。

照天姫は嘆き悲しみこれを辞み、昼夜引籠りて、肌の守本尊に祈誓しけるは、奴家不幸にして多々の艱苦に遭、幾回か危ふかりしを、御仏のかげにより、免るゝことをえたり。今また此地方に漂白し、娼妓となりて節を失はんとす。女子として貞を守得ざるは生て甲斐なき事なれば、はやく命を縮まし給ひ操を全からし給へと心に念じ、嘆泣しみひきかづき居る心裡、正に是王昭君の胡地に嫁し楊貴妃の馬嵬の哀みも斯やあると思ひやられて哀れ也。



く投て身小下橋了究と死女一 圖五第

2. 小宰相

藐姑射山人（戸沢正保）¹⁹『しのぶの露』（東京：桃華堂、明治29年〔1896年〕）に登場する、後醍醐天皇に随って隠岐の島に流される女房。下郎の小三郎を慕うが、警固の武士富士名義綱を帰順させるために、泣く泣く義綱に嫁ぐ。その心中は王昭君のようだと述べる。

絶えて知る人もなき西国武士のいと荒々しきが宿の妻にと出行かんこと、これも王事のためとは言ひながら、この女房の心の中はいかならんと推したまふ、はた漢土の往昔王昭君が古事も思ひ出でられて、その行くききは戎か狄か、孤鞍帝闕を辞して、身を蛮族に委ねけんも、かくやありけんなど無限の哀を催したまふ、



3. お愛の方

大村嘉代子²⁰『たそがれ集』（東京：新作家、大正13年〔1924年〕）「春日局」では、春日局は三男稲葉正利がお愛の方と結婚することを許さず、正利は「そりゃ何故でござりまする。お部屋様ともつかず、母上のお召使ひとでもなく、物語にきく王昭君のやうにして、正利が願も叶へられぬとは、如何なる御所存でござりまする。」と問い詰める。

¹⁹ 明治6年（1873年）－昭和30年（1955年）。イギリス文学者。東京外国語学校校長。シェイクスピア作品の翻訳などがある。

²⁰ 明治17年（1884年）－昭和28年（1953年）。劇作家。岡本綺堂に師事し、大正9年『みだれ金春』が評価され、「新演芸」などで劇評も手がけた。作品は『たそがれ集』、『水調集』などに収められている。

4. 八重垣姫

長尾（上杉）謙信（享禄3年〔1530年〕-天正6年〔1578年〕）の娘。人形浄瑠璃の筋書『大正十四年十月狂言絵本筋書』（東京：帝国劇場、大正14年〔1925年〕）大喜利「時代劇廿四孝狐火」一幕（結城孫三郎操り応用）に、足利将軍源義晴の時代に武田晴信（信玄）と長尾謙信の争いが起ったため、義晴の妻たおやめ御前が八重垣姫を、王昭君の例に倣って、武田家に嫁がせたと言う。

義晴の北の方たをやめ御前は王昭君の例にならひ、晴信の子勝頼と謙信の娘八重垣姫との縁組に依つて両家の和睦を計った。



5. 和宮（弘化3年〔1846年〕-明治10年〔1877年〕）

孝明天皇の妹。五才にして有栖川宮熾仁親王と婚約するが、幕府が朝廷に無断で日米修好通商条約を調印したことによって朝廷との関係が悪化したため、「公武合体政策」によって、文久2年（1862年）、十六才で第十四代将軍徳川家茂に降嫁した。

石野瑛『横浜近郊文化史』（東京：文学社、昭和2年〔1927年〕）第七章「江戸時代」『和宮様御使』二幕四場の序幕第一場「板橋宿外れ、石神井川の畔」では、和宮は王昭君のように政治の犠牲になったことを嘆く。

和宮は二人の忠心に涙ぐみ、王昭君の例を引いて、政治の犠牲となつたお身の上を啣たれたが、ふぢの方と八十岡に励まされ、お気を換へて御入興の行列を急がせられた。

*

本山荻舟（仲造）『美男かづら一維新外史 公武合体篇』（東京：報知新聞社出版部、大正12年〔1923年〕）²¹「小梅の夜」三では、池田青年が、幼少時の結婚相手を諦めて将軍家に嫁ぐ和宮の決意に王昭君以上の悲哀を感じたと言う。

『天下のために身をすてゝ、関東へのお興入れを御承引遊ばされた、その御心中を推し参らせると、わたしは泣かずにはゐられません。（中略）引事にしては畏れ多いかも知れませんが、王昭君の故事などは、物の数でもないと思ひます。』

*

福井久蔵『近世和歌史』（東京：成美堂書店、昭和5年〔1930年〕）第四十六「女流の勤王歌人」四、大橋卷子（文政7年〔1824年〕-明治14年〔1881年〕）では、「文久二年孝明天皇の皇妹和宮が公武合体の高等政策から将軍家に降嫁されるのを嘆いた長篇の如き、天下民心を強くうったものである」と言い、和宮の歌詞の中段に王昭君故事を引いていることを指摘している。

唐土の 鑑の影をつらみつ、 古き都を 立ち出けむ その古も 今更に 思ひこそやれ
そしてこの歌が「結構措辞共にすぐれてゐて、有髯歌人の作を凌ぐものである」と評価している。

*

磯子尋常高等小学校『国史教授に必要な日本女性史』（昭和6年〔1931年〕）第四章第二節「爛熟、衰退時代」八「和宮親子内親王」-静寛院宮には、和宮の将軍家への降嫁に対する心情を王昭君の降嫁に喩えている。

可憐なるは和宮で、折角有川栖宮家で御婚約の処を、当時東夷と卑下し且つ醜虜の徘徊すると思へる偏地に赴かるゝは、王昭君の昔も思はれて、中々同情すべく、

²¹ 本山荻舟『美男かづら一維新外史 公武合体篇』（東京：至玄社、昭和3年〔1928年〕）も同じ。

6. 百度踏揚 (モトフミアガリ)

琉球国尚泰久王（1415年－1460年）の長女。勝連城按司阿麻和利に嫁いたが、阿麻和利の謀叛のたくらみを知って父王に知らせた。伊波普猷（明治9年〔1876年〕－昭和22年〔1947年〕）『古琉球』改版（東京：青磁社、昭和17年〔1942年〕）「阿麻和利考」では、もし尚泰久王が阿麻和利を恐れて長女を嫁がせたのであれば、まさしく王昭君を胡国に嫁がせたことと同じであろうと言う。

王は甚しく阿麻和利を信用してゐたのである。もし王がいやいやながらモトフミアガリ（踏揚按司）を勝連に嫁がしめたとせば、これ王昭君を胡国に嫁せしむるの類で、愈々阿麻和利の勢力の侮るべからざる者があつたといふ証拠になる。

四 婦女

また忠臣・郷士・華族・豪商・投資家・長者・軍人・医者・庶民・盗賊などの妻女や女性教育者を描いた作品でも、婦女の悲運な境遇が王昭君に喩えられた。

1. お駒

曲亭馬琴（明和4年〔1767年〕－嘉永元年〔1848年〕）編演『美濃旧衣八丈綺談』（文化11年〔1814年〕序。東京：稗史出版共隆社、明治19年〔1886年〕）に登場する美濃国斎藤道三の忠臣尾花才作の養女。白木屋諸平の捨子。才作の一子才三郎と夫婦になるものと考えていたが、諸平に連れ戻されて、才三郎は牧村長道の娘活駒と結婚することになり、恨みの果てに川に身を投げるが、諸平の小者の岐蔵に命を救われて、王昭君が胡地に嫁ぐ気持ちがいながらも、岐蔵と枕を並べる。



再生の恩、値偶の誠、仇に受なば、人にあらず。かくまでわらはを思ぬる、岐蔵がうへも不便なり。とやせまし、かくやせまし、と決かねては、王昭君が胡地に帰げる心地しつ、初は嫌ひ、中は疑ひ、後は情けに羈されて、只いつとなく牡鹿鳴、小夜の袈を共にして、墓なく枕をならべしかば、（後略）

2. お菊

講談師伊東潮花（文化7年〔1810年〕－明治13年〔1880年〕）演述・柳葉亭繁彦著『上巻 奸僧退治』（東京：金泉堂、明治19年〔1886年〕）に登場する信濃松本藩の忠臣中根久兵衛の娘。久兵衛の冤罪によって追放され、奸僧養道（小泉半之丞）に騙され、養道の仮病を治すお金を作るため、養道が藪村に行つて金を工面して帰る間と我慢して、富豪船越丈一郎の側室になる。作品ではお菊の心情を王昭君が胡国に嫁ぐ心情に喩える。



病氣だに全快（おこた）りなば金調へて此身を贖ふ夫等の為に興んと云心体成んと悟れば、強て止めず、聽て駕へ救けのせ、我身も続いて乗る駕は、屠所の未の夫ならぬ、実に身を棄る藪村へ心成ずも急がせしは、王昭君が胡国に興く哀しみ似て哀れなり。

3. お袖

谷口流鶯の商業小説『黄金草紙』十章（東京：金桜堂、明治22年〔1889年〕）に登場する木村はるの娘。死んだ母が商業銀行に預けた預金を引き出すため、物見敏二が支援する。物見敏二は穀物商の叔父斎藤清兵衛の娘お富と結婚するつもりであったが、清兵衛が山形屋の丁稚岩太との縁談を承諾したため、お袖は物見敏二の窮地を救うため、山形屋の岩太に嫁ぐことを承諾する。作品ではその心境を説明するのに王昭君の匈奴への降嫁を引用する。

お袖が思義の為に身を仇し人の犠牲とする心のうちは如何ならん、胡地に帰し王昭君の昔も思ひ遣られて衰れなり。



4. 若狭

西村天囚『老嫗物語』（一名『女子家訓』）（大阪：図書出版会社、明治24年〔1891年〕）に登場する種子島の八板金兵衛尉清定の娘。老嫗が子供たちに語る、ポルトガル人牟良叔舎が到来して領主に火縄銃を献上するが、鑄造法を伝授させるため、清定は若狭を牟良叔舎に嫁がせる、胡国に嫁いだ若狭は故郷が恋しく和歌を詠じて牟良叔舎に聞かせ、王昭君や阿倍仲麻呂の悲哀を思わせた。

「月も日も大和の方ぞなつかしき我両親のあると思へば」
と口ずさみて、歌の心を胡国の言葉にうつして牟良叔舎に物語れば、遠（さす）が恩愛の情に西東の差別あるべくもあらず、御身が心根こそ世にも哀なれ、と涙一雫短き袖を湿しけり。実（げ）にや、彼の胡国に嫁し王昭君が嘆き、唐土に三笠山の月を忍びし仲麿が情も斯くやと覚えて哀なり。



5. お花

竹葉散人『繚乱想夫恋』（大阪：中村鍾美堂、明治25年〔1892年〕）に登場する金満家池田新平の娘。第五齣に、継母のお吉と馬丁の金次が父を詐欺罪に陥れて池田家に乗っ取ろうとする陰謀話を聞いて、頼りにする人もなく震えるところに、どこからか「王昭君」の謡曲が聞こえてきて、身につまされる。

斯やうにいみじき身なれども、猶も前世の宿縁の離れ遣らざる故ならん、諸人の中に撰ばれて、胡国の民に移せられ、漢宮万里の外にして、見慣れぬ方の旅の空、思ひ遣るこそ悲しけれ。（中略）王昭君が漢宮を出て胡国へ嫁きたる其古事も、何となう今はお花の身に適（つま）され、専（いと）ど悲しき増るなる歎きに、足も進み兼ね、（下略）



6. 嬌子

雨谷幹一（一菜庵）『鬪相馬の夜嵐』（東京：同盟出版書房、明治26年〔1893年〕）に登場する華族土田家の次女。華族相馬満種の側室西田龍が我が子仁種に家督を相続させるため、奸臣志田直道と共謀して満種を毒殺し若君正種を発狂させ、正種には不具者の嬌子を娶らせて、瘋癲病院に監禁する。その第六回は、嬌子が不具者として生まれた自らの不運を嘆いて王昭君の歌を琴で弾じ、短刀で自害しようとするところを、姉が父を心配させないよう、正種に安心して嫁ぐよう諭す場面である。

姉「先程父上の御居間にてふと耳に入る琴の調、王昭君の曲名に其方の心を察しやり、いたはしけれど、ヒョットして父上にかゝるいまはしき調して、今緊心の縁談中、其方の弾ずる心根をさとられもせば、中とに御心配を重ねる道理。」

7. キャゼリン嬢

雨谷幹一訳『五十万円の賊』（東京：一二三館書肆、明治27年〔1894年〕）に登場する、父の薫陶を受けて慈善活動に情熱を傾ける豪商ロードの娘。第十九回「探偵の料理人」では、盗賊に監禁されたキャゼリン嬢の様子を王昭君に喩える。

果せるかな、キャゼリン嬢は、花容愁を帯びて、豊頬転た痩せ、薔薇の花片の如くなりし唇の色も褪せ、涼やかなりし目元も涙の痕にくもりて、虞氏の怨、楊氏の悲はなくとも、確に王昭君が歎はみえたり。

8. お君

村井弦斎（文久3年〔1864年〕－昭和2年〔1927年〕）『小説家』二卷（東京：春陽堂、明治29年〔1896年〕）上之巻に登場する大坂熊手町の金貸し藪坂慥蔵の娘。奉公人筆助が好きであるが、慥蔵は欲を出して嫌がるお君を偶然知り合ったイギリスの豪商ヘンナリに娶せようとし、お君は親のため、仕方なく王昭君のように慥蔵に随行する。

（慥蔵は）「跡は兎も角、今日だけは親の為めだと想って、是非往て呉れ」と威したり賺したり、遂に娘を盛装させて番頭と共に梅田の停車場に來りぬ、涙湿^レ春風^ニ鬢脚垂^ル、低徊顧^レ影^ヲ無^ク顔色^ハ、²² 照君ならねどお君嬢、悄然として父の後辺に随ひ行く、



9. 錦木

江見水蔭の小説『遠山霞』²³（東京：青木嵩山堂、明治29年〔1896年〕）前篇に登場する盗賊鉄熊軍内の妻の連れ子。萩原左文次が主人春田政信のために亡父萩原豊後の遺志を継いで仇敵の中野城主大和田入道を討とうとするが悲願を果たせず、落ち延びて盗賊鉄熊軍内に騙されて殺されそうになるが、逆に軍内を斬り殺す。錦木は亡父が裕福な百姓であったが、洪水で田畑を失い、母は軍内に嫁いで病死したと言う。左文次は錦木を妻とし、春田家の若君鶴若の世話を任せる。後篇では滋賀柴屋町の打出の槌屋という遊女屋の立田の君として登場し、浪人となった萩原左文次を呼び止める。立田は左文次と別れた後に滝に身を投じ、悪人小藤六に救われて、遊女屋に売られたが、決して肌は許していないと言う。大和田入道は立田に目を留めて、遊女屋に身請けを交渉する。左文次は立田に入道の意に従って中野の城中に入ってくれと懇願する。作品では入道に身請けされる立田の光景を王昭君の降嫁に比較して、羊を屠殺場へ運ぶ木台だと描写する。

王昭君の昔忍ばれて、胡馬ならぬ乗物、玉の輿ぞと人離せど、屠所の羊を運ぶなる木台とこそ言ふべきなれ。

²² 王安石（1021年－1086年）『明妃曲』二首の第一首。「明妃初めて漢宮を出づる時、涙は春風に湿り鬢脚は垂る。低徊し影を顧みて顔色は無く、」

²³ 『遠山霞（とおやまかすみ）』前篇二十七章、後篇二十六章。江見水蔭（明治2年〔1869年〕－昭和9年〔1934年〕）は文学者で、通俗小説・推理小説などを創作し、硯友社・博文館などで雑誌の編集発行を担当した。

10. 雪姫

歌舞伎『祇園祭礼信仰記』²⁴「金閣寺の段」に登場する絵師狩野雪村の娘。旧主足利義輝を殺害してその母慶寿院を金閣寺の楼上に幽閉した松永大膳は、慶寿院が天井に雲龍の絵を所望したため、狩野之助直信を捕らえて、その妻雪姫を我が物にせんと、絵を描くよう迫る。その時の雪姫の窮状を胡地に連れ去られて色香を失った王昭君に喩える。

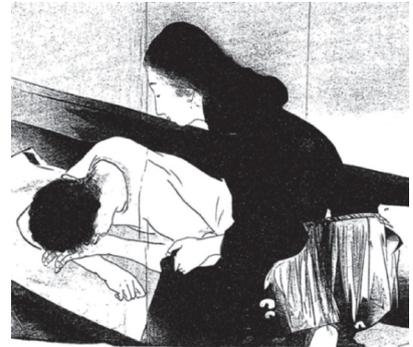
雪姫が夫は牢者の苦しみを引かへ、妻は綾錦蒲団幾重か其上に泣しほれたる有様は、王昭君が胡地の花色香失ふ風情也。

11. 糸子

江見水蔭『空中飛行器』（東京：青木嵩山堂、明治35年〔1902年〕）前編に登場する白井糸子。第二十回、糸子は春野鶴夫と幼馴染で、鶴夫の空中飛行器の発明に期待していたが、鶴夫が海女の婿になって空中飛行器の発明を断念したという蒲池甚太郎の讒言を聞いて、銅山に出資して破産した父を救うために、王昭君のように自分を犠牲にして債主の家に嫁ぐことを決意する。

糸子は口惜しさに其夜一夜を泣明かした。（中略）終に親の為、家の為、其一点張りに押しつめられて、債主の鳥府民右衛門の息子の寿美雄、則ち陸軍大尉の処へ嫁入する事と決定した。（中略）糸子が鳥府大尉の許へ縁付くのは、王昭君の古事を引くでも無いが、実に血の涙で行くのである。

ただ嫁いでみると寿美雄は善良な軍人であり、糸子は幸福な夫婦生活を送り、後に悪人甚太郎に打ち勝って、寿美雄とともに鶴夫を援助して発明を成功させる。



12. 長者の娘

山田馨『草花物語』（東京：文禄堂、明治40年〔1907年〕）「龍胆（リンドウ）」に、源義綱の庶子義尚は乱暴者で、山城の国の長者の娘に懸想し、娘の婚約者の儒者の息子を弔り殺しにしたので、娘は王昭君のように悲しんで家を出たと言う。

娘は態と美々しく着飾って、王昭君の其にもました思で門を立出た。

娘は義尚が酔った隙に懐剣で刺殺して自害した。その年にリンドウの花が咲き、義尚の化身だとされたと言う。

13. 妙子

前田曙山（次郎）『紅露』（東京：春陽堂、明治41年〔1908年〕）前編に登場する陸軍大尉鷲津三郎の妻。鷲津は清国の依克唐阿（1834年－1899年）を討伐に出て行衛不明となり、養母お金は政府の下賜金を受け取るために、鷲津の知人藤山伸次郎と共謀して妙子を追い出し、妙子は実家に帰って加田妙子と名乗る。伸次郎は指月尼と共謀して吉だけの御籤を引かせ、妙子と結婚して加田家の財産を奪おうと考える。妙子は伸次郎と対面して、あたかも王昭君が胡夷に嫁ぐような苦しみを覚える。

妙子はサアサアと母に促されて、丸で屠所の羊の心地がするが、是非なく



²⁴ 太淵渉編『絵入倭文範百段集』下（大阪：駸々堂、明治31年〔1898年〕）収。

も誘はれて、設けの席へ就く。式の如く申次郎と対ひ合ひて有るから、極りの悪いやうな、羞かし
いやうな、そして何となく恐ろしく、憂く、又情ないやうな心地で、宛ら照君が胡夷に嫁ぐ思ひ、
只ジッと下を向いている。

14. 紅絹子

小笠原白也『女教師』（東京・大阪：青木嵩山堂、明治42年〔1909年〕）に登場する
阿部病院の一人娘。寄宿する医学生中江一二とひそかに愛し合って妊娠したため、世間体を気にする父が二人を引き離し、紅絹子は王昭君のように台湾の知人
のもとへ送られる。

あ、昔譚に聞いたこともある王照君のそれならなくに、紅絹子は今夜を限り、老博士が曾て恩顧をかけられた門生の医師の一人が、台湾は澎湖島にある
ものの許に、流謫されうとするものである。何時帰って来るとの目的もなく。



15. お花

村井弦斎『日の出島』（東京：春陽堂、明治43年〔1910年〕）中巻「新高の巻」
に、雲岳女史が台湾遠征隊と称して医者、電気学者らを加えて生蕃啓発に出
発するが、船上で渋井玄蔵と離婚した宝田花に会い、その悲運を王昭君に喩
えて嘆く。

君が渋井玄蔵子に嫁したるは、照君の胡に嫁したるよりも、伏姫の八房
に伴はれたるよりも、甚しきものあり、殆ど天人の女を地獄の鬼の妻と為
せし如し。

「照君の心」では、お花は台湾にいる父の鉱山事業を助けるため、好意を
抱く木場医師への思いを断ち切って大酋長に嫁ぐことを決意する。父も王昭
君の例を引いて、娘に大酋長に嫁ぐよう勧める。

昔し王照君が胡に嫁した事を後の文人は大層悲惨の事に言つて、「今日は漢宮の人、明朝は胡地
の妾」などと哀れに計り詠じたが、王荊公計は「漢恩自浅胡恩深、人生楽在相知心」と言つた、照
君の身となつて考へて見れば、漢宮に在つて一度も天子に顧みられないと云ふ境遇よりは、胡王に
嫁して仲良く暮らした方が却て幸福だったかも知れない。



16. 蘭子

守田文治『破滅より新生へ』（東京：小西書店、大正13年〔1924年〕）に登場する大桐家の娘。「新しき
日の恋」では、蘭子は兄子爵の負債を返済するため、九州の炭砒王と言われる成金の
大竹鑛三に嫁いだ。このため王昭君に喩えられて周囲の同情を買つたと言う。

大竹は鉦夫より、成り上つて、一代の富を作つた程の人で、確かに立志伝中の人物であるには
相違ない。けれども、其の人格から言つて決して大桐家と縁組の出来得べき人物ではない。
（中略）であるから蘭子が、九州に嫁いで行つた時は、まるで王照君のそのやうに、世間の同情を買つた
ものである。

17. 澄子

加藤武雄『廃園の花』（大阪：サクラヤ書店、大正13年〔1924年〕）に登場する尾形家の長女。父の事

業が失敗したため、余儀なく東京の女学校を退学して郷里の三好屋呉服店の長男山村廉之助と結婚する。「職業婦人」では、父の自殺後に再び上京して会社の事務員となって帝国劇場で見た正木俊輔の新作史劇『王昭君』の概要が述べられ、王昭君故事の日本近現代における解釈が窺われる。

それは支那の歴史に名高い薄命の美人を主人公として、その古典的な題材の中に、愛と憎しみとの深刻な恋愛心理を託したものであった。彼女がひそかに愛し慕ってゐた帝王は、曾て彼女に一顧をだも与へなかつた。が、彼女が愈々胡の国に送られる事となつた時、彼女の帝王は思ひがけない彼女の美しさに眼をみはると共に、彼女の自分を愛してゐた事を知り、はじめて人間の心情といふものに触れる。而して、彼女を胡に送る可く定めた自分の軽率を悔いる。彼女は、あまりに残酷な運命にむしろ進んで身を託することにより、帝王の心を懊悩のどん底に陥れる。(下略)

そして澄子は王昭君と自分の運命とを引き比べるのである。

澄子は、何処か似通つた運命が王昭君と自分との間に感じられてならないのであった。

18. 妙子

飯田政良『女の夢』(東京：事業之日本社、大正14年〔1925年〕)に登場する司城家の娘。「誘惑」では、過去に関係を持った琵琶師の鈴木絃心が琵琶を弾いて歌う「王昭君出塞」の甘い悲哀に身がつまされる。

「夫れ一生の別離には、露の命も惜しからん、風に任する燈火の、悲痛骨髓に徹り来て、」絃心は聞ゆる美音を振絞って、王昭君の胡国をさして落ち行く心持を歌ひ出した。若い娘の感じ易い胸を喚るやうな甘い悲哀が妙子の涙を誘ふ。王昭君とも云はるゝ女の薄命を思ふと、昔から尽せぬ女の身の不幸、悲運が、我が身の事かと身につまされて悲しい。

19. 妻女

春日揆次郎『甲乱記』二卷(正保三年〔1646年〕)²⁵には、天正壬午(10年、1582年)の武田家滅亡の状を叙述し、その犠牲になつた妻女の苦しみを王昭君が胡夷に捕らわれた苦しみに喩える。

物の哀を留めしは、捨置かるゝ妻子・男に別れたる後室・子に後れたる老母の体、中々申すも愚なり。誠に杖柱とも頼みたる妻や子供は、自ら秋の木の葉の散り散りに、己が様様成行くは世を浦風に離れたる海士の捨舟よるべなく、身の置処のなき儘に、露の緑を打憑み、深山の奥に忍びつゝ、隠れてありける者共を、愛の山より掲捕り、彼所の谷より引出し、年頃も盛に、姿もさもありぬべきをば、邪見放逸なる者共が、押へ捕って妻になし、貞女の心を奪ひければ、王昭君が胡国の夷に捕はれしに異ならず。

20. 此花

小枝繁著・盈斎北岱画『古乃(この)花双紙』(梅川・忠兵衛)(東京・大阪：藤谷崇文館、昭和11年〔1936年〕)に登場する大和国布留郷の郷士桃井孫右衛門と園花の娘。第三巻では、帯解寺の好色な住職寂巖和尚が妖術を使って地蔵菩薩に変化し、此花を長櫃に入れて寺に送るよう信心深い孫右衛門の夢に告げたため、此花は王昭君のように心細い思いをしながらも承諾する。

此花は、此年頃深窓に養はれし身の知らぬ寺にたゞ一入行くことなれば、照君の一人胡国に嫁げる心地しつ、いと悲しくは想へども、父母の命といひ、殊に仏の告とあるに詮術なくて心にはあらねど、親の命の重



²⁵ 甲斐志料刊行会編『甲斐志料集成』7(甲府：甲斐志料刊行会、昭和8年〔1933年〕)取。

ければ、涙ながらに帯解へ行かん回応をしたりけり。

だが此花は途中で強盗に誘拐され、閉じ込められた牛が長櫃の中から飛び出して寂庵和尚に襲いかかり、寂庵は帯解寺を棄てて逃げる。此花は後に鳥原の遊女梅川となる。

21. 河原操子²⁶

明治36年（1903年）、内蒙古カラチン王府に教育顧問として赴任して、蒙古の女子教育を行った。徳富猪一郎²⁷『人物景観』（東京：民友社、昭和14年〔1939年〕）「日露戦役秘史中の河原操子女史」には、操子の蒙古行を王昭君の匈奴行に喩えている。

河原操子女史は信州松本良家の女。東京高等女師を出で、横浜なる大同学校に教鞭を執り、再転して上海なる務本学堂の師となり、三転して蒙古喀喇沁王府に入ることゝなつた。此時の女史は、宛も王昭君が、胡に嫁する以上の決心をもて、出掛けたものであろう。

五 娼妓

悲運な女性には唐人お吉など、娼妓となった女性も多く、文学作品においてその苦境が王昭君に喩えられている。

1. 唐人お吉

斎藤きち（天保12年〔1841年〕-明治23年〔1890年〕）。伊豆下田の船大工市兵衛の次女。安政元年（1854年）、生活の貧窮から芸妓となり、安政4年（1857年）、三日間、「下田条約」の締結のため健康を損なつたアメリカ領事ハリスの看護人となる。十一谷義三郎の小説『唐人お吉』によってその名が知られた。荒浪坦（市平）の漢文集『続煙屋文鈔』（東京：壺誠社、昭和18年〔1943年〕）下巻「侠妓阿吉伝」には、当時外国人は鬼畜のように蔑まれていたが、お吉は王昭君や烏孫公主のように国難を救えと言う支配組頭の説得に応じてハリスの看護人になることを承諾し、阿吉の犠牲によって和親条約が成立したと言う。

当時咸鬼畜視外人。支配組頭伊佐岑満。（中略）一夕伊佐聘阿吉于旗亭。阿吉素欽其為人。方請不得辭。（中略）伊佐徐説時局之艱難。引王昭君烏孫公主捨身報國故事。説勸循循。声淚俱下。阿吉結唇凝坐。蒼顔如死。感極面泣。稍久意決。（中略）於是乎。米使意亦始解。和親約成如建瓴。日米貿易之機。開國進取之図。発乎斯拳矣。²⁸

なお村松春水『唐人お吉』（東京：平凡社、昭和5年〔1930年〕）には、冒頭に村田春海作詞『保育唱歌』「王昭君」第四段「おもひきや、こともかよはぬ、くにひとを、つまとむつびて、たをやめの、まともなれぬ、皮ごろも、袖さしかへて、もろねせんとは。」を「王昭君を詠じた末節 春海」として掲載している。

²⁶ 明治8年（1875年）-昭和20年（1945年）。下田歌子の推薦によって横浜の「大同学校」、上海の「務本女学堂」、内蒙古の「毓正女学堂」の教師となる。

²⁷ 号は蘇峰。文久3年〔1863年〕-昭和32年〔1957年〕。思想家、歴史家、評論家。

²⁸ 「当時は咸鬼畜もて外人を視たり。支配組頭は伊佐岑満。（中略）一夕、伊佐は阿吉を旗亭に聘く。阿吉は素と其の為人を欽へば、方に請ふて辞するを得ず。（中略）伊佐は徐ろに時局の艱難を説くに、王昭君・烏孫公主の身を捨て国に報する故事を引き、説勸すること循循、声淚俱に下る。阿吉は唇を結び凝坐して、蒼顔死するが如く、感極まり面泣す。稍や久しくして意決す。（中略）是に於いてか、米使意亦た始めて解け、和親の約成ること瓴を建つるが如く、日米の貿易の機、開國進取の図は、斯の拳に発せり。」

2. 花紫

渥見竹次郎編『近世娼婦伝』（東京：渥見竹次郎、明治11年〔1878年〕）「品川楼花紫伝」（漢文体）によると、花紫は浅草の車屋中山半次郎の後妻の娘で、本名は婦美。半次郎は廃藩置県によって華族が東京から出なくなったため破産し、病気に臥せている間に放蕩者の養子が婦美を横浜の妓楼神風閣に売り、婦美は白玉と名乗った。「解放令」（明治4年〔1871年〕）が下って一旦は妓楼を出たが、家計のため品川楼の妓女となり、花紫と称する。散史氏の評には、花紫の苦しみは王昭君の苦しみよりも甚大だと言う。

余偏憐_二其薄命婦之孝志_一、深憎_二残忍男之狡心_一。王昭君之嫁_二胡国_一也、雖_下双神常不_レ絶_二悲嘆之雨_一、胡奴猶非_二牛馬_一、同是人也。又非_レ有_二三夫輪_二姪_一之_一。花紫也不_レ然矣。常交_二牛馬之群_一、而為_二人間不_レ可_レ為_二之業_一、一双玉手為_二千夫之枕_一、半点朱唇被_二万客嘗_一、比_二之於彼之嫁_二胡国_一者、其苦辛幾倍哉。

3. 糸吉

川崎の芸者。博文館編輯局校訂『人情本傑作集』（東京：博文館、明治43年〔1910年〕）下巻「仇競今様櫛」二編下巻では、上方の商人撰津国屋嘉千兵衛（かちべえ）は糸吉を身請けしたいと考えているが、糸吉は梅太郎が好きで気が晴れず、嘉千兵衛は糸吉を梅見に誘い、糸吉の表情が王昭君のようだとからかう。

かち「サアサア、酒ぢゃ酒ぢゃ。なんと糸吉。其様（そない）に王昭君が胡地（あびす）に嫁したやうな顔つきを。ちっとおきにさんせ。ハ、ハ、ハ、ハ、うまいうまい、サアサア、さすぞさすぞ。」

4. 喜遊

蘭方医箕作周庵の娘喜佐。『巖岩亀楼烈女喜遊』（東京：経済公報社、大正13年〔1924年〕）²⁹によれば、後に横浜の遊郭岩亀楼の遊女となって喜遊を源氏名としたが、尊王攘夷派の長州の浪士久原采女之正を思慕して、文久3年（1863年）、アメリカの鉄砲商人アポットに身を売ることを潔しとせず、自害する。

ほんに思へば月日立つのは早いもの、昨年の秋九月であった、久原采女さまと、野毛浦の寮で、嬉しい逢瀬のとき、酒事しながら、洲干島の絶景を眺めたが、恋しい采女さまは亡き骸となって、身は王昭君にあらねど。夷敵人に売らねばならぬ切ない境遇となった、父は誰あらう、箕作周庵、尊王攘夷のため嫌疑をうけて江戸掃いとなり、遂に貧苦にせまって、身は浮川竹の遊女となったが、元を質せば異人ゆゑ、父様、采女さまの敵である異人に、どうして身をまかさりやう。

5. 浜遊

京都鴨川の舞妓。宮崎猛矩『近藤勇』（東京：中村書店、昭和4年〔1929年〕）では、新撰組隊長近藤勇（天保5年〔1834年〕－慶応4年〔1868年〕）が独眼の隊士十津川八十大夫を匈奴に喩え、浜遊を王昭君に喩える。

『ウフ、十津川、きさまその顔で、浜遊をくどくなんて、まるで匈奴が王昭君を望むやうなものだなア』近藤も、つひおかしさに、ひき込まれて口を入れた。

6. 昔男

遊女ではなく、大年増の遊女に迫られる男を王昭君に喩える。平山蘆江『芸者繁昌記』（東京：岡倉書房、昭和11年〔1936年〕）「大年増」に、昔男は芸者屋の女将から手当要らずの旦那になってほしいと

²⁹ 原写本：神奈川奉行駒井相模守大学・幕府奥右筆神奈川奉行早川能登守・江戸町奉行根岸肥前守記録、大東義人補輯。

言われ、大年増であることを嫌って返事を延ばし、王昭君のような生贄の心地ながらついに承諾し、女将は男の事務所に押しかけてきたと言う。

いつもいつも大事にしてくれる事のやる瀬なさ、たうとうせりつめにせりつめたところで、一夜を女の為め提供する日とはなりにけり。胡国に送らるゝ王昭君もかくやあるべき、いけにへに奉らるゝ人の思ひしつゝ、男は一夜を千夜の長さに思ひて、哀しみしが。

六 花月

なお人物以外にも王昭君の美貌や離別の象徴として花や月に喩えられており、ここに附記する。

1. 花

(1) 桜

久田二葉『続園芸十二ヶ月』（東京：読売新聞社、明治41年〔1908年〕）三月「桜花の品類」に照君桜を紹介する。

▲照君桜。一重咲の大輪、花瓣は広くて厚く、花梗は常のものより長いそうです。楊貴妃よりは紅味が濃くて美しいと云ふところから斯く名付けられたと申します。

三好学（理学博士）『學軒集』（東京：岩波書店、昭和13年〔1938年〕）「春夏秋冬葉」名所の桜「荒川堤」の「珍奇なる桜」として八重桜の「王昭君」を挙げる。

八重桜の著しい品種の中には、祇女、朱雀、九重、王昭君、牡丹、江戸桜、松月、楊貴妃、福祿寿、日暮、紅虎尾などがあり、また同じく三好学『桜』（東京：富山房、昭和13年〔1938年〕）「桜品記載」には「王昭君」を掲載して、その特徴を詳述する。



(2) 花菖蒲

前書『學軒集』「花菖蒲と花菖蒲園」には、六瓣の濃瑠璃紫の花菖蒲に「王昭君」があると言う。

六瓣花は三瓣花の内花蓋が大きくなって六瓣に見えるもので、其の中単色花には「古稀の色」（赤紫色）、王昭君（濃瑠璃紫）、西施（白色）など、

(3) 朝顔

吉川英治『朝顔更紗』³⁰「父の恋」では、陽之助の父である蘭法医大村鳳齋が、別れた愛人から形見に贈られたという中国渡来の、緋色、大輪、纈纈咲きの朝顔の種を盗まれたと言って騒ぐ。愛人は別離を意識して花に「王昭君」と命名していた。

（あっ、何ていふ花だい。）と問ふと、愛人は、（王昭君。）と、支那の薄命な美妃の名を云って淋しげにわらった。（朝顔に似てゐるぢやないか。）（朝顔ですの。異国の。）（江戸にはないな。こんな緋の色も、こんな大輪も。一すばらしい纈纈咲きだ。）……（一夏が来たら、わたしだと思ってこの花を窓へ置いてくださいね。）この朝顔に王昭君といふ名をつけてゐた彼女の胸には、会つてゐた頃から、別離の傷みがあったのである。

2. 月

中川愛水編『麟言葉之華』（東京：浜本明昇堂、明治38年〔1905年〕）「星影鐘声」月には、王昭君が胡

³⁰ 吉川英治篇『新作大衆小説全集』第2巻『江戸長恨歌・恋易者・他四編』（東京：非凡閣、昭和14年〔1939年〕）収。

地で雁の南帰するを見て羨むと言う。

○長安一片の月、万戸衣を擣つ声、秋天星高うして銀漢淡く、梧桐声寒うして露団々、遠征の英雄は空を仰で歎し、蛮地の照君は行雁を羨みて鳴き、羈旅の学生、暗燈に声を呑み、寡婦は孤衾に腸を立つ。³¹

七 おわりに

当今の日本文学には陳舜臣『中国美人伝』（東京：中央公論新社、平成3年〔1991年〕）、藤水無子『王昭君』（東京：講談社、平成8年〔1996年〕）など王昭君自体を題材とする作品はあっても、人物描写の中に王昭君を引用する作品は多くない。それは国家や家の犠牲になって結婚する売買婚、政略結婚という王昭君の時代と社会背景が異なっており、異民族を蔑視する考え方もなくなったからであろう。だが戦前までの日本は国家や父母の権力が絶大であり、結婚相手は本人が決めるものではなく、近現代に至って、尾崎紅葉『やまと昭君』（明治22年〔1889年〕）やその門下の泉鏡花『愛と婚姻』（明治28年〔1895年〕）など、そうした結婚のあり方を問題視するようになった。³² 本稿の中でも、主人公が王昭君故事に接して「身につまされる」と表現する作品が少なくない。女性は身を犠牲にして異人に嫁いだり娼妓になったりして国家や家を救った偉大な女性として称賛されるが、個人の権利を主張する近現代の文学から見ると、悲劇のヒロインともなるのである。なお筆者は前に「日本近現代文学における王昭君の形象」³³を執筆した。本稿では前稿未収録の資料を用いて論じた。

³¹ 「長安一片の月、万戸衣を擣つ声」は、李白『子夜呉歌』秋歌の第一二句。「鳴」は「泣」、「立」は「断」の誤。

³² 前掲『日本歴代「王昭君」故事』参照。

³³ 「異文化研究」12巻、2018年3月、1-14頁。